

10年ぶりの事務局

全国循環器撮影研究会会長
安永國廣



平成 17 年 4 月横浜市において開催されました第 19 回全国循環器撮影研究会（以下、全循研）総会におきまして、関西循環器撮影研究会（以下、関循研）が全循研の事務局をお預かりすることになりました。関循研事務局としては 10 年振り、3 回目の役務であります。1986 年（昭和 61 年）東京の日本教育会館において初代長谷川光男会長の元、「シネ撮影研究会」が発足されて以来 20 年が経過しました。私で 8 代目の会長となります。

会の運営も「十年一昔」どころではなく、かなりの様変わりであります。平成 8 年、新開英秀会長から全循研の会費収支は会誌により広報し、平成 13 年江口陽一会長から「全循研だより」の発行により、年 1 回の会誌に盛込めないトピックスやリアルタイムな情報等取組んで頂きました。また、情報局を設置して頂き会員へのメールを使ったメルマガの発信と、各推進母体の活動の様子が瞬時に分かるようになりました。10 年前は、せいぜい Fax が一番早い活字が送れる通信手段だったのでしょね。宅急便による会誌の査読・校正が思い浮かびます。

さて、スーパーテクノロジスト認定制度検討委員会は、日本放射線技術学会（以下、JSRT）将来構想特別委員会報告の勧告に基づいて、平成 15 年度に組織されました。医療に対する社会、特に国民の厳しい視線が注がれているのは周知のごとくであります。そこで、医療に対する社会の厳しい評価に対応して安心・安全の医療を提供するためには、今にも増してチーム医療にかかわる各専門職がさらに専門性を高める仕組みが必要であります。国民はもちろん、患者や医療関係者など、社会から信頼されるために技師はどうあるべきか、今求められています。全循研も中澤靖夫学会化検討委員長が中心となって、1993 年に循環器技術を専門とする学会の立上げと専門技師に関する討論を行い、JSRT 企画委員長にも積極的な働きかけを行いました。当時は時期尚早という事で断念せざるを得ませんでした。全循研は、すでに 10 年以上前から専門技師認定制度については行動を起こしていた訳です。粘り強く取組んでいたら良かったとは後悔の念でしょうか。

全循研としては、医療放射線防護連絡協議会が中心となってまとめた「IVR に伴う放射線皮膚障害の防止に関するガイドライン」をうけて本会の研究班（田島班）が独自でまとめ、理事会で審議した「診療放射線技師がかかわる心臓カテーテル検査における透視線量及び被ばく低減技術のガイドライン」の普及と、2001 年からスタートした全循研主催の「循環器被ばく低減技術セミナー」の全国的な展開を行いながら、国民から必要とされる「循環器専門技師」実現に向かって関連学会との調整が必要とされます。会員の皆様のお知恵をお貸し下さい。

全循研、発足当初から携わった一人として、この 20 年の歩みには感慨深いものがあります。10 年目の事務局で至らない所が多々ありますが、「継続は力なり」の精神で全循研発展のため努力する所存です。忌憚のないご意見と絶大なるご支援をお願い申し上げます。